

神楽と広島交響楽団のコラボレーション

「オロチ」に

神楽の大きな可能性をみた

2009年10月

NPO 広島神楽芸術研究所 監事
北広島町 清水 勇二

秋真っ盛りのこの時期、広島県の各地域では秋祭りが行われ、芸北地域では、各地それぞれの「氏神」に神楽が奉納される。これを前にした、2009年8月31日 広島アルソックホールにて、実行委員会主催による ひろしま夏の芸術祭 メインコンサート「オロチ〜火と水への讃歌〜神楽とオーケストラのために」が初演された。

2003年 ロシアの文化・芸術の都 サンクトペテルブルグ市（旧レニングラード）建都300年記念祭に、広島県を代表する文化芸能団体として、旧千代田町（現 北広島町）の神楽団と広島交響楽団が派遣され、広島の伝統的な「技」と、文化の「質」を披露し、好評を博した。今回共演する両者の接点はそこにあり、ロシアから帰国後、公演に携わった関係者は、コラボでの共演の夢と可能性を熱く語ってきたが、6年の歳月の後、やっと実現したものである。

広島交響楽団は、広島の芸術振興と文化創造のための活動を続けている。日本各地には、多くの交響楽団があるが、広島交響楽団が、地元で郷土芸能「神楽」を継承している神楽団と共演することは、お互いの文化を理解し、高めあい かつ広島でしかできない新たな芸術文化の誕生を意味することになる。同時に、全国に発信できる広島県の文化の「独自性」と「誇り」となり得るし、今回の新しい試みが、関係者の熱意と努力により実現したことは、まさに快挙といえるだろう。

今回の公演には、広島のみならず今やアジアにまで活動の場を広げる**コンポーザー伴谷氏**、広島の音楽・芸術界になくてはならない存在の**マエストロ 指揮の秋山氏**、県内はもとより山陰地域の神楽交流を進める、神楽の第1人者 **演出の石井氏**、「世界へおくる”平和のメッセージ“」（日野原重明・小澤征爾）コンサートをはじめとする **名プロデューサー宮永氏**など そうそうたるメンバーが関わり、共演した広島交響楽団員と、竹下町長自ら団長となって率いる「北広島神楽団」団員の多くが、ロシア公演を体験している。県内に、郷土芸能「神楽」と広島交響楽団が存在するから、今回のコラボが実現したのでは

ない。6年前、はからずも、日本を遠く離れたロシアの地にあつて、それぞれ独自の文化と伝統をサンクトペテルブルグ市民に披露し成功を収めたという共通の体験と感動が、公演の「ベース」となり、この新しい取り組みを「なにがなんでも成功させたい」という切実な想い、いや「野望」ともいえる大きなうねりとなっていたことは間違いないだろう。

広島県内には、数百を数える神楽団があるが、今回の公演にあたっては、広島交響楽団と共にロシア公演を行った北広島町（旧千代田町）神楽団（「中川戸」・「山王」・「東山」・「八重西」）で構成されたのは、このような経緯があることから理解できる。

公演の第1部は、北広島町山王神楽団による新舞「滝夜叉姫」。歌舞伎の常磐津舞踊劇「忍夜恋曲者（しのびよるこいはくせもの）」と同じく、平将門の遺子「滝夜叉姫」と「大宅太郎光圀」が登場する歴史ロマンである。人気実力共に広島県内トップクラスの山王神楽団は、遠く北関東公演もおこなったほどの十八番「滝夜叉姫」を引っさげ、正統派の神楽を見せつけた。かつての主役役者は「脇」にまわり、若手の団員への世代交代が感じられた、決して公演の「前座」ではなく、会場いっぱいの観客を「さすが」とうならせた。

期待が高まる中、いよいよ始まった第2部「オロチ〜火と水への讃歌〜神楽とオーケストラのために」。雄大なスケールで構成され、神楽の中で最も人気のある「八岐の大蛇」をベースに、創作を加えた新しい神楽と広響とのコラボは、観客に感動を与え、広島県が誇る郷土芸能「神楽」の新たな可能性と、広島交響楽団とのコラボレーションを満喫した。

幕開きは、ホール全体が暗転。「オケピ」での、楽譜を照らすのは、氏神神社の神楽殿を浮かび上がらせる、蝋燭の「ほのあかり」とも見え、いい雰囲気である。

もちろん緞帳や幕が開くわけではないが、「板付き」（開演前から、役者等が舞台にいること）であることにまず驚かされた。「板付き」の開演は、神楽始まって以来の斬新な演出ではないだろうか。ステージには、中国山地を象徴する山段。特段、にこれといった仕掛けがあるわけではないが、単なる山段が、自然の雄大さを表し、大道具としては、秀逸た

る役目を果たす。この山々に、オロチが八頭、鎮座している。紫雲がたなびき、中国山地の夜明け、壮大な「音響」と、計算された「光」とが、まさにオープニングを告げる。

歌舞伎「仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら）・大序（初段）」では、この芝居がもともと人形浄瑠璃であったことから、幕があくと、役者は「人形」として存在し、少しずつ動き出し、役者にかわってゆく。この手法に似て、まさに、光と音に導かれて、主役たる「オロチ」が眠りからさめ、少しずつ息をはじめ。「はりもの」の大蛇から、魂をもった、生きた「オロチ」そのものに変身する演出は見事で、神楽団のリズミカルな「楽」と、秋山氏指揮の広響のおどろおどろしい「楽曲」は、まさにコラボレーションして、観客を、舞台へ、まさに「古事記」「日本書紀」にあらわされた古代の営みに引き込んでゆく。オープニングからしてこの迫力に度肝をぬかれる思いだ。

ほとんどの観客の、コラボレーションに対する「不安」と「期待」まさに「興味津々」の中、知らず知らずのうちに、不可思議な日本の古代の神話の世界へと引き込まれてゆく。

「舞台の両袖から登場する（時には空中から）はず」の八頭のオロチは、観客の意表をついて、それぞれ山段を少しずつ、少しずつ、「中国山地」から音もなく、下ってくる。石井氏の演出は、長年「神楽」に関わり培った経験と共に、更に発展させ、郷土芸能から、広島のいや日本の新しい芸術文化創造をめざしてきた軌跡が活かされ、みごとなステージを作りあげてゆく。

このすばらしい演出に応じて、オロチの「演者」は、八頭の見せ場を十二分に作り上げた。かつてのロシア公演神楽「八岐の大蛇」での観客の大きな拍手が思い出される。

その演技指導は、山王神楽田坂団長のお手のもの。彼の、長年の技術の蓄積と、「オロチ」成功にかけるすばらしい指導力が、それぞれ、表現も技法も違う複数の神楽団員を率いながら、まさに一体たる「オロチ」を作り上げた。オロチ役者の見事なチームプレーである、その「気質」「技量」共に、気魄に満ちた「オロチ」の中に、悲しくも7人目の姫は飲み込まれてゆく。その迫力はかつて経験したことのない、息をのむほどの感動を覚えた。

一転、舞台は静寂に包まれる。奇稲田姫が、姉姫の姿を求めて登場する。旧舞というより「能」に近い、無常観ただよう舞である。「オロチ」に代表される大自然の力に、翻弄される人間の弱さ、哀れみをも表現している。この姫に限らず、演者のほとんどが、これまでの神楽の舞に加え、「旧舞」神楽や能がかり的な舞・振りが取り入れている。

これまでの「スーパー神楽」に代表される、新舞の躍動感を交えながらも、全体的にはしっとりした、ゆっくりしたテンポで、この「オロチ」のテーマ「悠久の自然、輪廻、再生」を演じ、観客に共感させている。こうした振り付け・演出の妙を感じると同時に、旧舞から新舞へ、そしてスーパー神楽へ発展させた石井氏の演出は、神楽にかける情熱とこれまでの実績により、この新作全体の振り付けを、歴史をさかのぼらせた、いわば「旧舞への回帰」ともいえるものになっているが、むしろ斬新とすら感じてしまう。

奇稲田姫が、7人目の姉姫のおもかげを探してさまようシーンは、まるで能・歌舞伎舞踊「隅田川」で、さらわれた息子を探して、東（あずま）に下る母「班女（はんにょ）の前」を彷彿とさせる。「班女の前」は、わが子「松若丸」恋しさから、半狂乱となりながら、隅田川のほとり、1年前亡くなった息子を弔う「塚」に出会い、泣き崩れるのである。

同様に、姉姫のなきがらが、残した衣（紐）に集約されている。しかし、やっとめぐりあった姉姫の「おもかげ」が、スポット照明があったとはいえ、あの広いステージで、また多くの観客が見る会場で、その意味が理解できるか疑問だ。叙情的なシーンであるだけに、観客に訴えかける小道具や新たな演出方法はないものかと感じた。

このシーンで演奏される「神楽」の笛のソロ。会場全体に哀れがしみわたり、しっとりとした長時間のすばらしい演奏だった。奏者川本氏への伴谷氏の付きっ切りの指導、またそれに応えての熱演には大きな拍手をおくる。反面、この場面のみ、奏者はわざわざ「衣装」を替え、ステージを一周する必要があるのか疑問だ。彼女の熱演と努力に敬服はするが、オーケストラにおいても、「ソロ」演奏は自分の「場」ですることもあるはずだろう。

ストーリーの展開に合わせ、神楽の4人の「楽」と、100人近いフルオーケストラの

演奏は、違和感なくお互いに「相手」を尊重しながら進行する。秋山氏のタクトには、かつてのロシア公演の「残像」と、これからの「可能性」が秘められていたし、オーケストラ奏者には、新しい試みへの挑戦、また神楽の「楽」には、マエストロの指揮とプロ集団広島交響団の演奏に、「決して引けをとってはならない」との覚悟が見て取れた。

ただ、オーケストラの、中心的な打楽器のソロ演奏は、神楽の和太鼓との協調のためだったのかどうか。出だし、ストーリー進行中、それぞれのポイントで繰り返される「全体に響く、乾燥した音色」の打楽器の音は、オーケストラや作曲に関して素人の私には、南米のカリビアンサウンドを連想させられ、ちょっと違和感を抱いた。特に、他のシーンでは、おどろおどろしいストリングス中心による演奏が、「オロチ」やストーリーの進行と雰囲気マッチしていたこともあって、私が特にそう感じたのかも知れない。

この演目のヒロインたるのは奇稲田姫。姉姫を求めさすらい、その死を嘆き悲しみ、また足名椎・手名椎と悲しい別れを演じて、この作品のもうひとつのテーマである「家族・親子の愛」を具現化し、観客の涙をさそうが、途中からぱったりと姿を消し、このストーリーから忘れ去られる演出はいかがなものか。須佐之男命が、「アメノムラクモの剣」を奉げる天照大命を登場させる、斬新ともいえる演出の中で、主たる演者のひとりが消え去るのは寂しい。神楽「八岐の大蛇」の大団円では、須佐之男命とともに「歓喜の舞」を舞い、永遠の生命を寿ぐではないか。是非復活してほしいものだ。

この公演の「メイキング」NHKのテレビ番組では、演出の石井氏は、本来の須佐之男命によるオロチ退治を復活させるのにいろいろ策を練ったとのこと。その甲斐あって、勇壮な「八岐の大蛇」とのからみは観客の期待に十分応え、その上、更なる創作劇に仕上げていった。須佐之男命が大蛇を退治して、「めでたしめでたし」の従来のストーリーを踏襲せず、「御幣（ごへい）」でオロチを鎮め、「火の神」「水の神」として「再び天上に戻ってゆく」とは、面白い創作だったが、観客は、この御幣に特別な意味を感じることができたろうか。通常の神楽で使用される単なる「採物（とりもの）」としか解釈できていないのでは

ないかと感じた。大蛇を神に昇華させる「御幣」の魔力と存在を、もっとアピールすべきだろう。

その「御幣」の徳で鎮まり、やがて「神」となって中国山地と大海に還ってゆく「オロチ」。「出」の場面と同じく、静かに山や海をめざすのかと思いきや、パフォーマンスの、またまたの連続。楽曲の演奏時間の関係もあるのかとは思いますが、須佐之男命との死闘で、あれだけ存在感を示したのだから、「自然の神」「人間の営みを見つめる悠久の存在」として、堂々のフィナーレに向かうべきではないか。最後の最後まで、「これでもか・これでもか」のパフォーマンスは、食傷気味だった。

「自然界には、八百万の神が存在し、人間ではどうすることも出来ない自然の驚異に、畏敬の念をもち、自然と共存して始めて人間は生きてゆける」こんな自然崇拝の思想は、古代から連綿とうけつがれ、「神楽」の儀式にも生かされている。しかし、こと「科学万能の時代」となっては、「古臭い」「神道思想に通じる」など受け入れがたい側面もある。

反面、ここ今に至って「地球温暖化防止、自然を守ろう、自然があって人間が生きてゆける」と声高に叫ばれている。今回の「オロチ」のテーマは決して古代の神話ではなく、時を越えた「悠久の自然の偉大さ」そのものである。忘れかけている私たちに訴えるものが大きかったこと、また 広響とのコラボによって、神楽が私たちに訴える力を持っていることの「大きさ」が理解できたのも、今回の公演の大きな収穫だった。

神楽は、まさに時代を超えたメッセージを発信でき、テーマを訴えることができる可能性を持っていると確信した。

この公演を期に、広島が誇る郷土芸能「神楽」の可能性を更に広げ、広響とのコラボでは、神楽シリーズが定着し、お互いの「財産」となることを期待するものだ。

終わりに、この公演関係者の皆様全員に感謝申し上げると共に、この公演開催の大英断を下された広島県当局に敬意を表し、次回も、広島県の新しい芸術文化を創造できる機会を与えていただくよう、切に要望するものです。